



2011.3.11 東日本大震災

# 現地支援委員会

ニュースレター

「第9号」

from 東北

2013年10月23日

全国の諸教会の皆様、いつもお祈りと献金によるお支えと励ましをありがとうございます。各地で台風による被害が報告されていますが、被災沿岸部でも浸水などの被害がありました。特に福島第一原発の状況を覚えてお祈りください。今号では、宮城県牡鹿半島支援の様子をお伝えします。

## 牡鹿半島支援

☞ 荻浜小学校の避難所支援終了後、新たな支援の場所となった荻浜中学校。毎週炊き出しや害虫駆除などの活動を行いました

### 牡鹿半島支援のはじまり

東日本大震災直後、連盟対策本部が被災地調査を行い、牡鹿半島の被災された方々との出会いが与えられて支援活動が始まりました。4月初旬に桃浦避難所（荻浜小学校）と「給分浜対策本部」に支援物資を提供し、北関東連合などの協力を得て、週に1回のペースで炊き出しなどが始まりました。その後8月に仮設住宅が建てられる頃、仙台地区の5つの教会のメンバーで構成される「宮城チーム」が牡鹿半島に通い、被災された方々とお話をする中で今後の支援形態を協議しました。その結果、支援の目的を「寄り添い」とし、細く長く被災地に通い続けることを目指し、支援活動は月に1回のペースとすること、仮設住宅入居者のみならず在宅者も同じ様に支援することが確認されました。



2011年9月17日から「宮城チーム」としての牡鹿半島支援活動が始まりました。仙台から牡鹿半島まで往復5時間かかります。牡鹿半島では生野菜が不足しているとの情報から、葉物野菜などを袋詰めにし、1世帯1セットを支援物資としてお配りすることにしました。また、談話室をお借りして駄菓子コーナーと喫茶スペースを設けて被災された方々とお話する時を持ちました。被災された方々を覚えて淡々と月に1回牡鹿半島に通い、共に福音にあずかっていく支援活動が、今日まで続けられています。2012年3月には石巻市社会福祉協議会から「月浦と牧浜でも支援を必要としている」との情報を受け、現在は牡鹿半島の給分浜、荻浜、牧浜・竹浜、月浦、そして鮎川浜、黒崎地域などの約140世帯を支援しています。



### お茶っこ

「これからは物の支援よりもお茶を飲んで話をするなど、寄り添う、話を聞いてくれる支援を望む。高齢者は閉じこもってしまいがちなので、野菜を受け取りに来たときに、集会所などで人々が集まって話をする機会を持つことは良いことだ」と牧浜区長さんは言い、私たちの活動を受け入れてくださっています。現在この「お茶っこ」は、給分浜を大富教会が、牧浜を仙台教会が中心となって企画運営しています。初めはお茶とお菓子を出して自由にお話しするだけの「お茶っこ」でしたが、民謡などを歌って共に楽しむ時を持つようになり、ミニ七夕飾り、指編みマフラー作りなど簡単な手作業も始まりました。手作業をしているうちに親しい関係が生まれ、「歌っこ」も出てきます。音楽療法士の教会員の奉仕で音楽療法を定期的に行うことで、表情も生き生きとし、笑い有り、涙有りのひとときを過ごすこともあります。また、全国の教会・伝道所から届いた各地の銘菓や手作りクッキーなどをお出しすることもあり、被災された方々と一緒にいただきながら、今も覚え続けられていることを実感し、励まされています。被災された方々と全国の教会・伝道所とを繋ぐのも、「お茶っこ」の働きです。全国からの

後方支援に感謝しますと共に、今後とも牡鹿半島の皆さんを覚え続けてくださいますようお願いいたします。

### 浜や地域の様子

☞ 現在、高台への移住のために、山を切り崩して宅地造成工事が始まったばかりです

住宅の高台移転計画は立てられていますが、ようやく宅地造成工事が始まったばかりです。宅地造成は早いところでも2014年3月の完成。それから住宅や災害公営団地の建築が始まりますので、心や体に強いストレスを受け続ける仮設住宅から引っ越しできるのは、1年も2年も先のことです。また、壊れた港の岸壁工事や地盤沈下した浜の高（かさ）上げ工事などのための資材不足や工事関係者不足が深刻で、住宅工事だけではなく、浜の復旧工事、地震・津波対策工事も遅れがちです。2020年の東京オリンピック開催決定は、「被災地の復興が遅れるのではないか」との不安を生んでいます。「生きている間に新しい住宅に移ることもできないかもしれない」との悲痛な声を聞くこともあります。

牡鹿半島の主な産業は漁業で、カキ養殖が中心です。カキ養殖は震災後から再開されていますが、家屋の他に船や道具をほとんど失った漁師さんたちが自力で再建するのは難しく、公的補助がなければ復興はなかなか厳しい状況です。その補助金を受けるにも多くのハードルがあり、思うように浜の復興は進んでいません。秋はカキの収穫が始まる季節ですが、先日の台風26号の影響で、せっかく育ったカキがカキ棚から海に落ちてしまい、相当の損害も出ています。また、漁師をやめて町に移り住む人も多く、牡鹿半島の人口減少が続いています。人口が震災前の半分または三分の一になっている浜もあります。子どもの姿を見かけることも少なく、児童がいなくなって休校になった小学校も出てきています。それはまた、震災で家を失った若い家族が浜に戻って来ることを困難にもすることで、地域社会の存立にもかかわって行くことです。そのような社会に教会がどのように関わっていけるか、それは教会の宣教の課題として、イエス・キリストからの宿題なのかも知れません。（仙台教会 一瀬千恵子・小河義伸）

☞ 港の高（かさ）上げ工事と、カキ処理場建設の様子



☞ 全国からのお菓子



### トピック

いま仙台の大手スーパーの店頭で、「桃浦カキ」の特設コーナーができています。水産特区で初めて漁業権を得た企業が、「復興支援」と銘打って販売を始めました。けれども、牡鹿半島の桃浦だけが宣伝されている状態は、異様としか言いようがありません。桃浦には、一人で宮城県漁協に残って漁師を続けている方がいます。この方は一民間企業の施設となった桃浦のカキ処理場を使うことができず、隣の漁港のカキ処理場を間借りして、養殖カキの収穫に励んでいます。海から引き揚げた殻付きカキの重さは尋常ではありません。処理場に運ぶだけで重労働です。それが来年3月まで続くのです。しかも、たった一人で。先日の宣教神学フォーラムでも取り上げられたことですが、弱い立場の生産者を苦しめている「力」と闘わなくては、状況は少しも好転しないと思われています。（大富教会 齊藤弘司）